

就職活動体験記

三木 香恵子（文学部文学科文芸・思想専修）

はじめに

私は関東のとある市の職員として、一般事務（司書）という枠で採用をいただきました。

私の就職活動は、公務員は行政職を受験せず司書職のみ受験、民間企業も3年生でのわずかなインターンシップと早期選考のみという、おそらく非常に少数派なものでした。そのため、あくまでこのような進路選択もあるのだなという一例として、また司書採用試験に関する情報の一環として、本稿がみなさんのご参考になることがあれば幸いです。

司書職を志望するに至るまで

はじめは大学1年生の春に司書課程の受講を決めたことにありますが、この時点で私は「中学校の職場体験で行った図書館を学問として学べるのは面白そう、資格も取れて受講料が他の手段よりも安いならなお良い」程度の認識しかありませんでした。

おぼろげに司書という選択肢が浮かんだのは2年生の夏ごろでした。今は立教大学を去られたエレン・ハモンド先生の図書館サービス特論を受講し、その中で様々な図書館のサービス、特に海外の事例を知るなかで、図書館はこれほどたくさんの方ができるのかと、どんどん図書館に対して魅力を感じるようになりました。しかし当時は司書職の採用数が少ないことから、公務員試験を行政職で受験し、希望を出して将来的には図書館で働きたいと考えていました。

司書職を目指そうと決めたのは3年生の秋ごろでした。夏休みの図書館実習で市立図書館に行き、そこで働く司書の方々の姿を見て憧れたというのが単純ながら最大の理由です。特に印象的だったのが選書会議の様子で、利用者と蔵書のことを熟知している職員の方を見て、司書はプロフェッショナルな仕事なのだ改めて感じました。そこで「単に図書館で働くだけでなく、あんな司書になりたい！」と思い、図書館で長期的に働くことができる司書職を志望することに決めました。

民間での就職活動について

3年生の6月に周りに流される形でいくつかウェブ説明会への参加とインターンシップの応募をしました。恥ずかしながらどちらも片手に収まる程度の数です。なぜここまで少なかったかという、公務員を主軸にしていて民間就職はあまり考えておらず、インターン参加者対象の早期選考で運よく内定が取れば一安心という大変安易な発想だったためです。当然この甘さが通用するはずはなく、内定は0でした。3年生の2月で早期選考が途絶えたため、これ以降民間での就職活動は一切行いませんでした。

司書職は採用数が少ないのに、司書職受験を決めた3年生の秋以降もなぜほとんど民間の就職活動をしなかったのかということ、どうしても司書になりたかったという単純な理由です。私の性格上、これと決めたらそれ以外には興味がわかず、そのような状態で志望動機をいくら考えても薄っぺらなものしか出来上がりませんでした。そこで私は、ならば潔く司書に絞ったほうがより多く準備ができて合格の可能性が上がるだろう、今年だめならアルバイトか派遣の仕事しながら再挑戦しよう決めました。両親とも相談し、ありがたいことに賛同してくれたため、このような司書専願のスタイルを取ることができました。

では民間での就職活動は無駄だったかという点、そのようなことはありません。司書以外の仕事について考える機会になりましたし、何より選考を実際に経験できたことが良かったです。面接はもちろんですが、特にインターンシップでグループワークを経験することができたのは、司書の選考でも非常に役立ちました。もちろん面接やグループワークの練習をして対策をすることは可能ですが、本番の緊張感を体験するという意味でも、就職活動はやっていて良かったと思います。公務員試験対策との両立は大変ですが、自分の希望や性格を考慮しながら民間での就職活動をやるのも良いと思います。

試験対策について

私は市立図書館が第一志望群でしたが、市立図書館以外にも複数受験しました。具体的には、国立国会図書館、国立大学法人（1）、都道府県（2）、市町村（5）です。括弧内は受験予定総数で、志望先から最終合格をいただき途中で辞退したものも含まれています。司書職はそれぞれの採用数は少ないですが、受験できるチャンスはそれなりに多くあります。

都道府県と市町村に関しては、5月頃から早期に選考を行う自治体もあれば、秋に行う自治体もあり、複数の受験が可能です。しかし、6月中旬と9月後半は同日に多くの自治体で筆記試験が行われるため、どこを受験するか選ばなければなりません。受験全体に関しては、日程・準備の許す範囲で受けたいものを受けるという点で大学受験に似ていると思います。

私が受験した試験の内容は以下になります。

- ・エントリーシート or 面接シート ・教養試験 or WEB テスト
- ・専門試験（図書館情報学 ※国立国会図書館は他の科目での受験も可）
- ・小論文 ・集団討論 ・集団面接 ・個人面接

このうちどれが行われるかは受験先によりますが、エントリーシート（面接シート）、教養試験（WEB テスト）、個人面接の三種類は全ての受験先で行われました。

・教養試験

教養試験は、公務員の行政職の教養試験とほぼ同じ内容で、マークシート形式です。

私は2年生の2月から公務員試験の通信講座を受講しており、それを主軸として対策しました。通信講座に決めたのは、体育会部活動に所属しており、予備校に通う時間的余裕はないと判断したためです。実際に通信講座を受講すると、移動時間で授業動画を見るなど好きな時間に勉強できるのは便利でしたが、勉強スケジュールの自己管理が難しく、分からない点があってもすぐには質問できないなど不便な点も多々ありました。通信講座でも十分対策は可能でしたが、もし余裕があれば予備校も検討してみてください。

勉強開始当初は公務員全般を考えていたため民法などの専門科目も並行していましたが、司書職に絞った秋以降は教養科目のみ勉強しました。数的処理を中心に勉強し、文章理解や理科社会科目は3年生の3月以降に本格的に取り組みました。

・WEB テスト

WEB テストは民間企業で使用されるSPI等と似ていますが、私が受験したものは理科社会科目も一部出題されました。また英語と現代文も、数的処理と同じくらいの数が出題されました。しかし時間配分にさえ注意すれば、教養試験の勉強で対処できると思います。

・専門試験（図書館情報学）

専門試験の形式は受験先によって異なります。10問すべて記述式のものもあれば、選択肢問題と単語記述が混在するもの、選択問題があるものなど様々です。過去問を公開している場合もあるので、各自治体・機関のWEBサイトを参照してください。

私が活用したのは『司書もん』（後藤敏行）という図書館採用試験専用のテキスト（全3巻）です。授業で学んでいても、特に法律関係やデータベースなどについて新たに知ることが多く、はじめは自力で問題を解くことがほとんどできず、解説を読みそれを理解することからはじまりました。内容は図書館の自由に関する宣言から図書館史、海外のデータベースに至るまで幅広く、解説でもさらに関連知識について説明されているため、このテキストだけでも十分対策可能だと思います。さらに「カレントアウェアネス・ポータル」や図書館関係の雑誌等から最新の動向を把握できれば、面接対策にもなり更に良いと思います。テキストに取り組み始めたのは3年生の年末ごろですが、本格的に取り組むことができるようになったのは授業が終わった春休み以降でした。

正直なところ専門試験への準備は試験日になっても不安で、足りないという焦りが大きかったです。専門試験は分野が広いだけでなくそれぞれにいくらかでも学ぶべきことがあるため、対策時間は多いほど良いです。教養試験はもちろん重要ですし、国立国会図書館や国立大学法人は一次の教養試験を通過しないと専門試験にすすめませんが、「一通り授業を受けたから何とかなる」ことは決してないご注意ください。

・面接

面接でよく聞かれたのは自己PRや学生時代に力を入れたことなどパーソナリティに関する一般的な質問に加え、なぜその自治体・機関を志望したのかという志望理由が中心でした。特に地方公共団体の面接では、自治体の魅力や実際に訪れてみてどう感じたかなど、図書館関係ではなく自治体そのものについて質問されることも多くありました。面接官は図書館関係者の方は多くても一人、その他は行政職の方の場合が多いと思います。また最終面接で市長直々に面接を行う場合もありました。そのため受験先の図書館情報のみならず、自治体の特徴についても事前によく調べることが必要です。

司書に関連する質問では、司書課程を受講したきっかけ、司書を志す理由、司書としてやりたいことを聞かれることが多かったです。一方「自分がカウンター作業をしていたときに絵本が一部破れた状態で返却され、利用者に聞いたら『元からだった』と言われた場合、どう対応するか」といった、事前想定が難しい実践的な質問をされることもありました。対策は難しいですが、実際に図書館で働いたらどうするかを時々想像したり、図書館実習を行った方はその時のことを思い出したりすると良いと思います。

私はインターンの参加数も少なかったため、エントリーシート・面接ともにほとんど経験がありませんでした。そのため4年生になってから大学キャリアセンターのキャリア相談の枠でエントリーシートの確認や面接練習をお願いしたり、面接実践講座に参加したりして練習をするようにしました。また民間志望の友人に面接練習をしてもらい、アドバイスをもらうこともありました。

対策をする中では、「なぜ」と自分で深掘りしていくように意識しました。はじめはとても大変でしたが、曖昧だったものが徐々に自分のなかではっきりと言語化されることで、自分の回答に対して納得がいき自信がつくだけでなく、何より私はどうして司書になりたいのがより明確になり、モチベーションが高まるきっかけにもなりました。

・情報収集

最後になりましたが、これが一番重要ではないかと思います。司書職はそれぞれの採用数が少ないだけでなく、毎年どこで採用が行われるか分からず、数年ぶりに採用が行われたり、あるいは例年あった採用が突然なくなったりすることが多々あります。できるだけ多く受験して可能性を広げたいと考える場合、採用情報のこまめな確認が不可欠です。

私が実際に使用していたのはこちらです。

WEBサイト：日本図書館協会「図書館職員求人情報」、「公務員試験情報こむいん」

Twitterアカウント：「図書館司書になる！」

日本図書館協会のもの以外は個人のまとめサイトのようなものなので、必ず各自治体のWEBサイトから採用情報を確認してください。

また3月ごろから、採用説明会を開催している自治体もあります。秋採用の自治体でも、3月に説明会を行うものが多かった印象です。上記の採用情報サイトでは説明会情報まですべて得ることはできないため、地元の自治体や興味のある自治体、例年複数人採用が行われている自治体（神奈川県、埼玉県等）は、WEBサイトや公式SNSから定期的に情報収集をすると良いと思います。

おわりに

私はいわゆる縁もゆかりもない自治体に採用していただきました。市内のテーマパークに幼少期に一度行ったことがあったのみで、司書の採用があることを初めてその自治体を意識しました。司書職の場合、地元ではない土地を受験する可能性は大いにあると思います。大切なのは、その自治体、図書館のことをよく知ることだと思います。個人的におすすめしたいのは、実際にその自治体に行って図書館だけでなく町全体を散策してみることです。資料を読み込むだけでは分からない、町や人の雰囲気を実際に肌で感じられます。無理のない範囲で行ってみてください。

また、これは公務員試験全般に言えることだと思いますが、選考時期が民間に比べて遅いため、周囲の人は内定があるのに自分だけがないと焦ることもありました。長期戦となり苦しいことも多いですが、適度な休息も挟みながら、合格に向けて頑張ってください。

最後になりましたが、どのような進路であれ、本人が納得のいくものであることが一番だと思います。就職活動は自分自身と向きあい続ける大変なものですが、皆様がそれを乗り越えて納得のいく進路選択ができるよう、影ながら応援しております。

資料情報

後藤敏行『司書もん：図書館職員採用試験対策問題集』図書館情報メディア研究会, 2020（第2版）.

日本図書館協会「図書館職員求人情報」(<https://www.jla.or.jp/tabid/334/Default.aspx>)

「公務員試験情報こむいん」(<https://comin.tank.jp/>)

図書館司書になる！Twitter：@librarian_wiki